

インターンシップの活用 ―国立国際美術館のケースから

加須屋 明子（美術館博物館委員・京都市立芸術大学）

近年、各地の美術館博物館施設で、インターンシップの活用例が多く見られるようになってきている。国立国際美術館では、平成15年より主として大学院在籍中の学生を対象としたキュレトリアル・インターンシップ制度を開始し、現在まで延べ30人を受け入れてきた。受け入れ規定にもあるように、主として将来学芸員を志望するものを対象とし、具体的な作業に従事してもらうという点に特徴がある。そうした特徴と活用の事例についてここで報告し、今後の受け入れに向けての提案を行いたい。

国立国際美術館でインターンシップを開始した背景としては、数年後に万博公園内の旧館から中之島の新館への移転を控えて、業務の増加が予想されていたこと、また美術館活動において、各種ワークショップや講演会等の諸行事の比率が高まり、平行して展覧会事業も開催してゆく必要があった反面、人件費はむしろ削減方向であるという困難な状況が続いていたこと、そして現場の実務を経験する機会を得たいという大学の学生側からの要望の高まりという三つの要素があった。学芸員は、外側からは華やかに見えるかも知れないが、実際には地道な作業の繰り返しとその積み重ねがその仕事の大半を占める。美術館の内側で共に仕事を行ってみることによって、仕事の流れや業務量と内容について具体的なイメージを得ることができ、ひいては将来の仕事において役立てもらえることを美術館では期待した。当初より、インターンとしての在籍中に何かまとまった仕事に携わって仕上げることを目標としている。基本的に任期は1年であるが、希望があれば翌年までの延長を認めている。具体的な作業内容としては、インターン全員では館の諸行事（講演会、コンサート、ギャラリートーク等）の補助を行ったり、それぞれが新聞を一誌ずつ受け持っていて、関連記事の切り抜きとスクラップブックへの貼り付けを実施したりしている。また、各自が展覧会企画もしくは教育普及のいずれかに所属して、それぞれが学芸員の指示の元に作業を遂行する。展覧会の企画補助であれば文献の整理、略歴の作成、図録の校正などの作業や展示撤去作業補助等に携わる。教育普及の場合には、様々な子ども向けのプログラムへの参加、企画の詳細な打ち合わせやワークショップの実施、子どもを対象としたギャラリートークの実施などを行う。近年は映像担当のインターン枠も募集し、ビデオ作品の上映会などの補助を行っている。

これまでに、インターン在籍中もしくは終了後に、専任あるいは非常勤学芸員の職を得て、国立国際美術館での経験を生かした仕事に携わるケースが多々見られ、喜ばしい限りである。また美術館にとっても各展覧会企画や諸行事の運営がインターン生の補助のおかげでスムーズに遂行できていることから、この制度が美術館と学生と双方にとってメリットをもたらし、うまく機能していると言ってよいだろう。ただし、これは常に両者の意識的な努力と微妙なバランスの上に成り立つ状況であることは言うまでもない。